
英雄の花嫁

王翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄の花嫁

【Nコード】

N2451Y

【作者名】

王翔

【あらすじ】

戦争が勃発する時代、貴族令嬢のセルアは退屈な家を抜け出し、ある日誘拐されそうになったところを軍人のラグーシに助けられる。セルアは彼に想いを寄せ、彼もまた同じだった。彼を恨んでやまない美少女ミーナ、それを心配し彼女に想いを寄せるシーヴァ。四人の主人公が織り成す恋物語……。 (イラストがあります)

登場人物紹介

【登場人物】

登場人物紹介とイラストです。
見なくても問題ないと思います。
ちよつとずつ増えていきます。

> i 3 4 2 1 5 — 4 1 7 0 <

セルア・テファニー

伯爵令嬢。なぜか少年のような格好でよく町へと出かける。気は強
めでしかし打たれ弱い。

> i 3 4 2 1 6 — 4 1 7 0 <

ラシーグ・アルファ

明るい好青年の軍人。なかでも優秀で将来性がある。女遊びが多い
が、セルアに想いを寄せ始めてからはしなくなる。素直で話しやす
い。

ミーナ・ロシエッタ

ラシーグの元婚約者の美少女。ラシーグを殺したいというのが彼女の願い。普段は優しく笑顔を絶やさないが時に残酷。

シーヴァ・カーベン

軍人の青年。真面目で曲がったことが嫌い。人付き合いが苦手な人があまりいない。ミーナに恋心を抱き、彼女を止めるためにあれこれする。

セルア【出会い】

《レンディタウン》という町が存在した。

セルファ王国の中心部に位置する首都である。

日中は、観光客や仕事で駆け回る人々、はたまた遊びまわる者達で基本的にどの通りに出ても人の姿が絶えなかった。

溶けそうなほど青い空からは明るい太陽の日差しが降り注ぎ、町を照らしていた。

一見して平和そうな国だが、そうではなかった。

隣国との関係が悪化し、戦争まで発展しているのが現状だ。

現在は境界線での戦乱が主で、町まで危害は及んでいない。

この先、どうなるかは不明だが基本的にこの国の人間は楽観的な者が多く、いつも通り明るい雰囲気ばかりが溢れていた。

《デルー通り》の小さなカフェは、飲み物やケーキなどはもちろん、昼食を食べることもでき昼間は大勢の人でごった返しだった。

カウンター近くで店のなかの様子を見回していた立派な髭を生やし、高価そうなウェイター用の服を着た男がいた。このカフェを経営す

るワシルド・ウェイデンである。ワシルドは、自分の店で笑い合う客の様子を眺めたり、常連客と世間話で盛り上がるのが日常であった。

自分がこの店を経営しているというのが誇らしかった。評判も上々で、売り上げもかなりのものだ。

気分良く店内を眺めていたワシルドの元の一人の店員が駆け寄って来た。

「マスター、お客さんです」

「客？」

「はい、裏口の方から」
「なるほど、またあの子か」

ワシルドは裏口から、という言葉だけで客が誰なのか容易に分かった。

苦笑いを浮かべ、裏口へと向う。

店の奥の狭苦しいスペースにドアがある。

そのドアは開いており、一人の少女が立っていた。

年齢は十五、十六に見え、肩まで伸ばした黄金色の髪は王族や貴族を連想させ、人目を引くがその服装は田舎の牧場か農場あたりで働く

少年風の白いシャツと膝あたりまである黒いズボン。頭には黒っぽい赤色の帽子を被っていた。可愛らしい顔立ちをしていたがその服装の

せいか取り立てて目立つわけでもない。

「こ、こんにちは」

「また抜け出して来たのかご令嬢」

この少女は、有名な資産家であるグラレゴ・テファニー伯爵の一人娘、セルア・テファニー。

セルアはどういうわけか、屋敷に一日中いるのが耐えられないようにで使用人の目を盗んで町を出歩く。当然、令嬢がいなくなったとなれ

ば使用人が探しに出てくるわけでのような格好をして少しでも変装しているつもりだ。

遠目で見ると分からないだろう。

セルアがこのカフェに来るのは決まって、使用人の姿を近くで見かけて見つかる危険性がある時だ。

「とりあえず、しばらく匿ってもらえますか」

「はいはい。じゃあ、そのテーブルにでも」

「分かりました。あ、りんごジュースをお願いします」

セルアはテーブル前の椅子に腰掛ける。

ワシルドが持っていたりんごジュースを飲み干す。

「それにしても、令嬢が屋敷を抜け出すなんて関心しないぞ？ この町は大きいだけあっていろんな人種がいる」

「大丈夫ですよ。どうせ、いざこざに巻き込まれるのは美人ばかりですから」

「そうとも限らないぞ？ 何もこの町に存在する犯罪ってのは殺人や強盗なんかもある。おっさんでも巻き込まれる」

「犯罪に巻き込まれる可能性なんて、限りなく少ないですよ」

そう言っただセルアはりんごジュースを飲み干し、コップを置くと立ち上がった。

「もう行くのかい？」

「はい、もう行きます。今日は大人しく帰ります」

「珍しいな。今の話で恐くなったか？」

「違いますよ。友達が家に来るんです。すっかり忘れてました」

つまりその友人はセルアの自宅で待ちぼうけを喰らっているわけである。

友人が来るのを忘れるなどという失態を犯す者が他にどれだけいるだろうか。

セルアは、さつさとドアを開けると路地に出た。
入り組んだ路地は薄暗く、ゴミが散乱しているという状態で、湿った空気が漂っている。

これを気を悪くする者もいるんだろうが、いつも人目を避けるためにこういう道を通るセルアにとっては何も問題はなかった。

早足に歩いていると、目の前に一人の黒ずくめの男が現れる。

セルアは怪訝そうな顔でその男を見上げた。

「お嬢さん、どうだ？ いい話があるんだが」

「わ、私は今話している暇はないんです」

そう言って、反対方向へ向って歩き出そうと思ったがそちらにも男がいた。

逃げ道がない。

しかも人気のないこの道では通行人も目撃者もない。

「……セルア・テファニーだろう？」

「人違いじゃないですか？」

とにかく落ち着き払った口調で答えた。

相手の目的は何となく予想がついた。相手はこちらを名指ししているのだ。

大方、誘拐されて身代金を要求するのだろう。

「顔は知ってるんだ。とぼけても無駄だ」

「そ、その……これから約束があった」

「じゃあ行っていいですよ、と言つと思つか」

答えはノーである。

誘拐犯がわざわざ都合に合わせてくれるなんてことはあり得ない。

どうしても誘拐されるのは避けたかった。金が払われれば解放されるだろうが、それまでに何をされるか分からない。

おろおろし始めた時、声が響いた。

「遅くなってごめん。待ったかな？」

そんな言葉を発し、一人の青年が間に割って入って来た。

この国の人間にしては珍しい黒髪で青空を閉じ込めたような瞳で整った顔立ちの好青年である。黒い軍服と、軍人用の帽子を被っている

ことから軍人であることが分かる。

「おい、お前、痛い目みたくなかったら」

黒づくめの男が青年の襟首を掴むが、彼はすぐにそれを振り払い懐から拳銃を取り出し、男に向ける。

この青年がいかに軍人の格好であることから本物と見て間違いないだろう。

「俺の連れに何か用かな？」

男達は黙ってその場を早足で立ち去った。

青年はセルアの方へ向き直り、明るい笑顔を浮かべる。

セルアは顔が熱くなり、息が苦しくなってきた。

「大丈夫？」

「は、はい。大丈夫です」

答えた後はしばらくぼーっとしていた。

はっとして首を左右に振る。

私は何を考えてるんでしょうか？　いくら助けてもらったとは言え、初対面の相手に一目惚れしそうになるなんて……。

「令嬢が一人で出歩くのは関心しないな。次からは使用人の一人でも連れて来たらどうだろう」

「そ、そうですね」

ぎこちない返事しかできなかった。

もう頭が真っ白で思考が追いつかない。

「じゃ、気をつけるんだよ　あ」

青年は立ち去ろうとして、足を止めて再度セルアに向き直った。

「一応送るよ」

「ひ、一人で大丈夫です……」

「念のためだ。また何かあったら困るだろう？」

「お願いします……」

セルアはこくりと頷き、青年の後に続く。

会話もないまま路地を歩き続け、おろおろした。何か話さなければと考えている内に青年の名をまだ聞いていないことに気づいた。

おどおどしながら話しかける。

「な、名前は何て言うんですか？　私はセルア・テファニーです」
「俺はラシーグ。ラシーグ・アルファ。見て分かるだろうけど、軍人だぞ？」

「分かります。軍人の格好した一般人なんていませんし、もしいた

ら軍人になれないマニアなんでしょう」

セルアは、会話を少しでも弾ませようと冗談交じりに言った。
ラシーグは、無邪気な笑顔を浮かべたまま口を開く。

「そうだろうなあ」

そんな会話のなか、セルアは服装を改めなくなった。
農場で働いているような格好で引き立つものは何もない。

「な、何かお礼をしたいんですが」

セルアがそんなことを口走るとラシーグは、しばらくキョトンとした様子で彼女を見つめ、やがて明るい笑顔を浮かべる。

「じゃあ、五日後に食事をしようか」

「わ、分かりました。私のおごりですよね？」

自分がお礼をするんだから、それが当たり前だろうがセルアは一応尋ねてみた。

「ああ、いや、俺のおごりでいい」

「え？ でも、それじゃお礼にならないです」

「大丈夫大丈夫。一緒に食事してくれるだけで十分だから」

ラシーグはセルアを屋敷まで送り届けると、満面の笑みを浮かべ

た。

太陽のように明るく笑顔で、彼をますます引き立てる。

果たしてこの青年に想いを寄せる女が何人いることだろう。

考えるとセルアは不安になった。しかし、すぐにハツとする。

何を考えてんですか、私は！ 相手は初対面です。どういっ者はよく知らないって言うのに……。

「じゃあ、当日迎えに来るからきれいな服でも揃えときなよ？」

「う………努力します」

立ち去って行くラシーグの後ろ姿を見つめていたセルアの心臓は今までにないほど高鳴っていた。

セルアはラシーグと約束した日までに何度か町に出かけたが、他の女と歩くラシーグの姿を二、三度見かけてがっかりした。

いずれも違う女を連れていた。

太陽のような笑顔を振りまいて相手と盛り上がっているのを見ると気分が沈んだ。

……きっと、アイツは遊び人なんです。だから、気をつけないと。そうは思っても、ドキドキする気持ちは抑えられなかった。

ミーナ【出会い】

《レンディタウン》の《デルー通り》にある小さなカフェに一人の青年が足を踏み入れた。

ドアが開いたことでぶら下がっていたベルが店内に鳴り響き、新たな客が来たことを店員達へ知らせた。

店員の一人が青年を席へと案内された。

青年が案内された席は窓際であり、どこことなく落ち着くことができた。

その青年は、灰色の髪に紅い瞳……仏頂面であることからどことなく人を寄せ付けない雰囲気か漂っていたがそこそ顔立ちは整っていた。黒い軍服を着ていることから容易に軍人があると分かる。

現在、戦争が起こっているこの国では軍人を町の様々な所で見かけるのは珍しくない。

この青年 シーヴァ・カーベンは軍人である。しかし、戦争がまだ酷くない今は待機中の身だった。

このまま大きくなることなく、終わればいいのだがと思いつつも、そんなに都合良くいかないとも思った。

彼は真面目だった。頭も切れるし、銃の扱いも一流で完璧だった。人付き合いが苦手なことを除けば。

極端に人付き合いが苦手な彼には友人がいないと言っている。

当然の如く、恋もしたことなく一生仕事に生きるんだろうと信じて疑ってなかった。

注文したコーヒーが運ばれてくると無言ですすった。

そうしているうちに昼時になったらしく、人が少しずつ増えてきて気づけば次に来る人は座る場所もないのではないかと思うほど人々が溢れかえっていた。

人ごみが苦手なシーヴァは気分が悪くなりそうだったので、そろそろ店を出ようかと思ったのが。

店員の一人が少女を引き連れてこちらに来て、申し訳なさそうに口を開いた。

「すみません。今、この店は満員でして……相席をお願いいただけ
ますか？」

「あ、ああ」

戸惑いがちに答えた。

ここで帰っては、相席になる人を嫌がったのかと思われる気がしたのでもう少しいることにする。

少女はぺこりと頭を下げると、向かい側の椅子に腰を降ろした。目を見張るほどの美しさだった。

輝く黄金色の髪は流れる滝のように長く、アクアマリンのような澄んだ瞳……白いワンピース。今までに見たことのない美人がそこにいた。

いつも無感情のつもりでいるシーヴァも動揺を隠せなかった。

これは、一目惚れというやつだろうか？　しかし、相手のことをよく知りもしないで好きになるというのは。

シーヴァが困っているうちに彼女は、天使のような笑顔を浮かべる。

「はじめまして。私はミーナ・ロシエッタよ。この近くの服屋で働いているのよ。あなたは？」

「俺は、シーヴァ・カーベン。見たら分かるだろうが……軍人だ」「そのようね。軍人なら、そろそろ戦争に行かなきゃいけない頃かしら？」

そう質問する彼女の様子は、心配するふうでもなく笑顔を浮かべたままである。

何か普通の者とは違う　そんな感じがした。

正直、ミーナの瞳は何を映しているのか分からなかった。

ミーナはサンドイッチを注文して、運ばれてくるとすぐに食べ始める。

シーヴァは改めてミーナの姿を見据えた。

やはり、震い立ってしまいそうなほど美しかった。

見るところ、まだ十代後半といったところである。これだけ美しい容姿を持ちながらまだ二十歳も超えていないのを考えると、もっと成長したら一体どうなるのかと思った。

店内を見回して見てもミーナに目を向ける男は数え切れないほどいた。

それらの男は皆、彼女に魅入っていた。

この場に一体何人、彼女に恋をした者があるだろうか。

それとは裏腹にミーナは全くそんなこと気づいてない様子であった。あるいは、気づかないフリをしているだけなのかもしれない。

「あなた、私のお友達になつてくれない？」

「友達……？」

こんな美人に友達になつてほしいと言われたら、当然の如く嬉しいがなぜ初対面の相手でもそれも男にそんなことを聞くのか分からない。

ミーナはシーヴァの考えを察したように付け加える。

「私ね、軍人のなかに殺したい男がいるの」

その一言に背筋が凍るような気がした。

この女はきつと、恐ろしい奴なんだろう……。

シーヴァはその理由は気になり、尋ねることにした。

「それはまた、なぜ？」

「私と彼は婚約者だったの。幼馴染みでね、よく一緒に遊んだ。私は当然のように彼に恋をして、まるで決まっていたことかのように婚約した。けど、彼は婚約を破棄したわ。理由は簡単。私を愛してなかったのよ」

「……………」

驚きを隠せなかった。

こんなにも美しい女性を愛さない男がいることに驚いた。

ミーナはその彼を本気で愛していたのだろう。それでもなければ、婚約を破棄されたところで殺したいと思うはずもない。

愛が強ければ憎しみも強いか。

この辺りでミーナが働いているならば、その幼馴染みである相手もこの近くの軍部にいることだろう。

果たして自分が今まで話した者にその相手はいたのだろうか。

人付き合いが苦手なシーヴァは、同じ軍部の者のこともほとんど知らなかったので見当がつかなかった。

「殺すのよ。散々痛めつけて殺してやるの。私はね、別に彼が私を愛していなかったことに怒ってるんじゃないの」

ミーナは険しい表情をころりと笑顔に変えた。

「私のことを愛していないのに、愛してるって嘘をついてたのが許せないの」

軽く眩暈がして席を立ちたくなかったが、それはいけない気がしてシーヴァは、彼女に尋ねてみた。

「その男の名前は？」

ミーナはしばらく沈黙したまま、何の感情も映さないアクアマリンのような瞳で彼を見つめていた。
やがて、ゆっくりと口を開く。

「ラシーグ ラシーグ・アルファ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2451y/>

英雄の花嫁

2011年11月6日01時12分発行